

宮良殿内にある魯般尺と三線尺

A study of *Rohan-Jyaku* and *Sanshin-Jyaku* in *Miyara-Dunchi*

又吉 光邦

Mitsukuni MATAYOSHI

【要旨】

本論文は、はじめに石垣島の宮良殿内にある魯般尺と竹富島と久米島の魯般尺の相違について述べる。特に、宮良殿内の魯般尺に記された尺の使い方に関する記述が、継承正しいものであることを魯班経にある魯般真尺の解説文との類似性の高さから示す。また、宮良殿内には、魯般尺の他にもう一つ変わった尺が保管されている。本論文では、それが三線を作るための尺、つまり三線尺と呼べるものではないかとの観点から、考察を述べる。

【Abstract】

This paper describes the difference between the *Rohan-Jyaku* which exists in the *Miyara-Dunchi* at *Ishigaki* Island, each *Rohan-Jyaku* at *Taketomi* Island and *Kume* Island. Explaining the usage of the scale written on the *Rohan-Jyaku* of *Miyara-Dunchi* resembles the explanation sentence of the *Rohan-Shinjaku* in *Rohan-kei* closely. In addition, an another scale not to understand the usage is kept in *Miyara-Dunchi*. In this paper, a conjecture that it is a scale to make *San-Shin* is given.

【目次】

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1. はじめに | 4. 宮良殿内の二尺五寸の尺 |
| 2. 唐尺 | 4.1 2.5倍尺の作者と作られた時期 |
| 3. 魯般尺 | 4.2 琉球王府時代の2.5倍尺の長さ |
| 3.1 魯般尺に記された利用方法 | 4.3 2.5倍尺の目盛 |
| 3.2 魯班経 | 4.4 2.5倍尺と三線のための尺 |
| 3.3 一般尺と魯般尺の吉凶の関係 | 4.5 三線の長さとの魯般尺 |
| 3.4 魯般尺のメートル法による長さ | 5. まとめと課題 |
| | 謝辞 |
| | 参考文献 |
| | 付録図1, 付録図2 |

1. はじめに

今では、家を建てる時や墓に関係する行事を除いて、風水的な事象を目にすることは無い。一般的には、風水は金銭にまつわるおまじない的な扱いとなっている。

風水と言え、羅盤（図1参照）のような道具が印象的であり、琉球王国時代にそれを用いた風水見（役人）がいた。この風水見が用いたのは、羅盤だけではなく、それ以外の道具として、近年「唐尺（からじゃく）」、「唐定（からじょう）」と呼ばれた物差しがある（文献 [1-14]）。後に細述するが、この尺は、正式には魯般尺と呼ばれる物差しである。

本論文では、まず石垣市の宮良殿内に保管されている魯般尺に焦点をあて、明らかになったことを述べる。その後、宮良殿内に保管されているもう一つの物差しについて考察を与える。



図1 羅盤 香港製（著者蔵）

2. 唐尺

沖縄には最近まで唐尺（カラジャク）と呼ばれている約43cm程度¹の長さの物差しがあった。現在、その使用はほぼ途絶えているものと思われるが、戦前生まれの方々には、その物差しを見たことや利用したこと、利用方法などについて覚えておら

れる方々もいる。例えば、竹富島でお世話になった松竹荘のおじいさんは、「昔はそれで家の門の幅とかをはかったよ。ひとけーし、ふたけーししてね」（2008年1月19日）と語ってくれた。ここで「ひとけーし」とは、魯般尺を一度、長辺方向へ返すことを意味する。つまり、2倍の尺の長さとなる。そして「ふたけーし」は、2回返すので、計3倍尺の長さとなっている。

また、石垣島の八重山民俗館へ石垣島内の旧家を移設されている大工の方に聞いたところ、「昔はあって、門の位置決めに用いた。今でも大切にもっている人はいるかもしれない」（2008年1月19日）と話をしてくれた。

沖縄の魯般尺についての先行研究（報告）は、窪 [5] [6] [21]、渡邊 [7] [8]、笠原 [9]、又吉真三 [10]、徳井 [11]、宮城 [12]、伊是名村史 [13]、小出 [14] などがあるが、これらは沖縄県内で唐尺の存在を確認し、若干の使用例、例えば、門の開口の位置決め、墓の入り口の寸法、記された目盛り当てられた文字の解釈などの報告についてなされたものであった。小出 [14] を除いて先行研究の報告は、簡単な使用例のみ記載されている。それらは、唐尺の使用例に対する関心よりは、唐尺の目盛り文字の違いに力点がおかれた感がある。また、窪 [6] 以外の先行研究は「唐尺」の文字を当てている。著者も以前はそれに習っていたのだが、本論文でそれを訂正したい。後で、魯般尺の写真で確認することになるが、琉球王府時代の沖縄では「魯般尺」と明記され、その発音は「ロハンジャク」に近いものであったであろうと著者は推定すべきだと考えている。

沖縄の魯般尺に関する具体的な使用例についての報告の初出は、山城正の「ガンの寸法と唐尺との関係一 済井出のガンの保存修理作業から一」[名護博物館紀要9『あじ

¹ 魯般尺の長さについては、時代や地域の厳密な区別が必要であると著者は考えている。日本の度量衡は、明治度量衡以前と以後で変わること。また、尺の長さは日本国内だけでなく、中国などでも地域、時代によって変わることなどが挙げられるからである。

まあ』, pp.101-116, (1999) [15] と思われる。また山城は、沖縄の仏壇の作り方² についても『沖縄の度量衡』で図を用いて具体的に説明を与えている [名護博物館, pp.60-64, (2003)] [17]。

また、又吉は文献 [1] において沖縄の魯般尺の長さについての詳細な記述を与え、久米島博物館にある仲原家寄贈の魯般尺の裏面に書かれた文言の翻刻と翻訳の試みがある。

本論文では、宮良殿内の魯般尺について細述して考察を与えることにする。また、参考までに、竹富島の喜宝院に収蔵されている魯般尺の写真と裏面の翻刻も載せる。

3. 魯般尺

宮良殿内にある尺は、図2のように冒頭に「此真正魯般尺」の文字が見える。この出だしは、久米島博物館にある魯般尺、竹富島の喜宝院の魯般尺についても同じである。すなわち、現在「唐尺(カラジャク)」と呼称されることが常である吉凶を測る尺が、実は「魯般尺」という名称であったことを示している。

沖縄の地でいつ頃から、唐尺(カラジャク)と呼ばれるようになったかについては、定かでない。窪は文献 [6] で、「・・・八重山地区で使われ(中略)。ただ、一、二の建築関係者が二、三の文字を知り、以前魯般尺といい、風水説に関係する物差しで、金庫、門幅、棺桶の計測に使用した告げた程度であった」と記している。



図2 「此真正魯般尺」

琉球王府時代のそれは「魯般尺」の文字で認識され、「ロハンジャク」に近い発音であったと推定、かつ呼称すべきと考える。

3.1 魯般尺に記された利用方法

沖縄に残っている魯般尺には、実は利用方法が記されている。久米島博物館にある仲原家寄贈の魯般尺(以後、久米島魯般尺と呼ぶ)の裏面、竹富島喜宝院にある魯般尺(以後、喜宝院魯般尺と呼ぶ)の裏面、そして本論文で報告する宮良殿内にある魯般尺(以後、宮良殿内魯般尺)の裏面に魯般尺の使用方法が記されている。

本著者は、文献 [1] において久米島博物館にある仲原家寄贈の魯般尺の裏面を風水の観点から見直し、誤字と思われる箇所を直しながら翻刻して試訳を与えたが、今回、本論文で紹介する宮良殿内の魯般尺の裏面の文面が、修正後の翻刻とほぼ同一の文言で書かれていることを発見した。同様に、竹富島の喜宝院に収蔵されている魯般尺も誤字、脱字と思われる箇所が多いものの、殆ど同一の文言が記されていることも確認した。このことは、沖縄にある魯般尺が、風水の概念を具現化し、規格が統一されて作られた道具であったことを示している。

以下に、宮良殿内の魯般尺の裏面と表面の写真(著者撮影)と翻刻を記す。また、久米島魯般尺、喜宝院魯般尺の翻刻も記すことにする。宮良殿内魯般尺、久米島魯般尺、喜宝院魯般尺の裏面の文章には句読点がない。そのため、翻刻における句読点は、著者と中国人の唐剣紋さんが与えた³。また今後の研究の助けとなると思うので、付録1~2には、久米島と喜宝院の魯般尺の裏面の写真を掲載した。

² 仏壇と唐尺の関係については、又吉真三の『那覇市史資料編第2巻中の7那覇の民俗』の中のp.234にも簡単な記述がある。

³ 句読点は、意味的に区切りがありそうな箇所ではじめに著者が挿入し、あとで私のゼミの学生である中国人学生の唐剣紋さんにチェックしてもらった。



図3 宮良殿内魯般尺(左：裏、右：表)

此真正魯般尺乃公輸子所製，內包羅造化辨別吉凶，化凡豎造安墳，以及神合龍日用家司，什物船隻厥倉，凡天下有尺寸之物，皆經此尺。其間用度取一尺四寸四分，用財義官本病離劫害八字。財義官本可用，病離劫害不可用。凡量物開二尺一寸為一白，在尺內義字上。二尺八寸為八白，合尺用吉上。用四尺三寸一分，合四緣一白在本上。用四尺三寸八分，合財字。能依此法萬無一失。以右手用尺，將財德為首，依字脚向外，從便取法。

圖4 宮良殿内の魯般尺の裏面文字

此真正魯般尺乃公輸子所製，內包羅造化[化辨別]吉凶，化凡豎造安墳，以及神合龍日用家司，什物船隻厥倉，凡天下有尺寸之物，皆經此尺。其間用度取一尺四寸四分，用財義官本病離劫害八字。財義官本可用，病離劫害不可用。此量物開二尺一寸為百在尺內義字上。二尺八寸為八百，合尺用吉上。用四尺三寸一分，合四緣百在本上。用四尺三寸八分，合財字。能依此法萬無一失。以右手用尺，將財德為首，依字脚向外，從便取法。

圖5 久米島の魯般尺の裏面文字

此真正魯般尺公乃輸子所製，內包羅造化辨別吉凶，(化)凡豎造安墳，以及神龕日用家司，什物缸隻厥倉凡天下有尺寸之物，皆經此尺。(其)間用度取一尺四寸四分，用財義官本病離劫(害)八字。財義官本可用，病離劫害不可用。此量物開二尺一寸為一旬在尺內義字上。二尺八寸為八白(合)尺內吉上。用四尺三寸一分，合四緣一白在本上。用四尺二寸六分，合財字。能依此法萬無一尺，以右手用尺，將財德為首，依字脚向外，從便取法。

圖6 喜宝院の魯般尺の裏面文字

図4～6において、太字ゴシック体は、異なっている箇所を表す。2行目にあるの文字は、フォントが無いため**豎**で代用してあるが、おそらく**豎**と同じ意味と思われる。また、久米島魯般尺において**[化辨別]**は、写真では、赤茶けた汚れによって見づらいが、肉眼では確認できる文字列である。竹富島魯般尺における()内の文字は、欠落した文字であろうと推定して、著者が挿入した文字である。

まず、驚くことは、誤字や脱字の違いを認めることができるものの、3つの島に保存されているそれぞれの魯般尺に記された文章はほぼ同じである、と言うことであろう。このことは、琉球王府時代において広く琉球の島々で統一された魯般尺が用いられたことを示す。後述するが、それぞれの魯般尺その長さもほぼ43.6cmとなっている。つまり、統一された長さで、かつ使用方法やその利用意味も統一された物差しであったことになる。このことは、いかに魯般尺が琉球の地において重要な物差しであったかを示すとともに、吉凶にまつわる統一した概念が、琉球王府管轄地域に根ざしていたことを強く示す。

宮良殿内の魯般尺の文字は、付録図1、付録図2と比べて見ると分かるが、非常に美しい楷書体で記されていることが分かる。さすがに著名な士族の家にある物差しと言ったところであろうか。また、宮良殿内の魯般尺の裏面の文字で誤りと思われるのは「**合龍=龕**」だけであり、文章全体の正確さにも一目置けよう。久米島魯般尺における「百」の文字が正しければ、久米島魯般尺の正字率が高くなるが、記された文を読むと風水用語の「一白」であることは明らかであるので、宮良殿内の魯般尺の正字率の高さが支持されるべきと思う。

一方、喜宝院魯般尺に記された文字は、

他の二つの魯般尺の文字に比べて美しくなく、また脱字が多い(3.2節を参照)。おそらくは前者等に比べてそれほど教養の高くない士族が製作した魯般尺と思われる。

次の図7に、宮良殿内魯般尺の試訳を示す。ただし()内は、著者が補足した文言である。

これは公輪子製造の魯般尺で、内に造化(万物)を含み、凡そ豎造安墳(墓の造成)の吉凶を見分け、神龕(神棚)、日用雑貨、船や蔵など世の中の長さあるものの縦に用いる。

一尺四寸四分に間を取り、「財、義、官、本、病、離、劫、害」の八字を用いる。「財、義、官、本」を用いるべきで、「病、離、劫、害」を用いるべきではない。

二尺一寸で物を開いたこの量は一白を為し、(魯班)尺の「義」の文字の上に来る。二尺八寸は八白と合い、(魯般尺を)用いれば「吉(文字)」の上である。四尺三寸一分を用いれば、四緑一白で、(魯般尺の)「本」に合う。四尺三寸八分を用いれば、(魯般尺の)「財」の字に合う。この法に依れば、万に一つも失わない。

右手に尺を持ち、財徳を上にして文字に依りその足(文字の下)を外に向けるのが手本である。

図7 魯般尺の裏面文字の試訳

試訳から裏面の文字(文章)が、魯般尺の使い方を記した解説文であることが分かる。主に、易学(風水)の吉凶と目盛の関係性について述べられているのが特徴と言えよう。また、図7の試訳の最後の3行は、ちょうど図3の右側のように「財徳」を上にして、文字の下側(脚)を外側に向けて、対象となる物・場所を測ることを勧めている。そうすれば「万に一つも失わない」(次に示すが、魯班経の中では「百に一つも失

わない」である）と論じている。

ここ沖縄（琉球）の地において、薩摩藩に搾取されてきた苦難の時代に“吉”をもたらして“凶”を避けることができると考えられたこの物理的な物差しは、琉球の人々にとって非常に心強いものであったであろうと思われる。さらに言えば、既得権者としての支配階級層の士族（西欧で言う貴族）にとっては、己の地位・財産を永続させるために、必須のアイテムとして認識されていたと考えて良いだろう。

3.2 魯班経

中国の明代に午榮によって編著されたという書物に魯班経がある。中国古代建築の風水に関わる経典でその中に、魯般真尺の記述がある（文献 [19]、p.120）。文献では、簡字体で記されているので、それを唐さん（3ページ脚注参照）に繁字体に直してもらった。次の図8に記す。また、図9には著者による試訳を記す。

一読すれば解るが、これはほぼ琉球に存在した魯般尺の裏面の文と内容的に同じも

魯般真尺 按魯般尺乃有曲尺壹尺四寸四分，其尺間有八寸，壹寸准曲尺壹寸八分。内有財、病、離、義、官、劫、害、吉也。凡人造門，用依尺法也。假如單扇門，小者開二尺壹寸，壹白，般尺在“義”上。單扇門開二尺八寸在八百，般尺合“吉”上。雙扇門者，用四尺三寸壹分，合四祿壹白，則爲本門，在“吉”上。如財門者，用四尺三寸八分，合“財”門吉。大雙扇門，用廣五尺六寸六分，分兩白，又在“吉”上。今時匠人則開門闊四尺二寸，乃爲二黑，般尺又在“吉”上。及五尺六寸者，則“吉”上二分，加六分正在吉中，爲佳也。皆用依法，百無壹失，則爲良匠也。

図8 『魯班経』の「魯般真尺」の記述

のと言ってよい。琉球の魯般尺は、扉・門に関する記述が省略されているだけで、残りの文章は、ほぼ同じである。つまり、この魯班経に記述された魯般真尺と琉球の魯般尺に強い関係があることは明らかで、琉球の魯般尺が少なくとも明代の頃より存在していた可能性が強く示唆される。

さらに、文献 [19](p.26) には、「魯班又名公輸般，是春秋末期的魯国人」と記載されており、図2に見える宮良殿内魯般尺に記述された「公輸子所製」とも符合する。このことは、明国あるいはその後の清国の時代に明代の魯班経、あるいは魯般真尺そのものとその解説が琉球の地にもたらされ、それから使用法を裏書きした“琉球の魯般尺”が、士族によって製作されていた可能性が高い事を示している。

魯般真尺。魯般真尺は、曲尺一尺四寸四分を案分し、その尺に八寸がある。（魯般尺の）一寸は、曲尺の一寸八分。（魯般尺には）財、病、離、義、官、劫、害、吉がある。凡そ人の作る門には、（魯般）尺の法に依る。仮に単扇門なら、二尺一寸で開いた一白で、（魯）般尺“義”の上に合う。両開きの門は、四尺三寸一分を用い、四祿一白に合う。すると本門は“吉”上にある。財門の如くは、四尺三寸八分を用い、“財”門の吉に合う。大きな両開きの門は、広く五尺六寸六分を用い、二つに分けて白、それはまた“吉”の上にある。今、職人が四尺二寸の広い門を開くなら、二黒となるので、（魯）般尺はまた“吉”の上にある。五尺六寸に及べば、加えて六分にすれば吉の中に正しくあって、それは“吉”の上を二分することになり、よろしくなる。みな法に照らして使えば、百に一つも失わないので、良匠となる。

図9 『魯班経』の「魯般真尺」の試訳

文献 [19] によれば、魯班経は生卒年不詳ではあるが、明代の北京提督工部御匠司司正の午栄が編集したとされている。琉球の士族が、午栄の編集した魯班経の中から魯般尺の説明箇所を抜き出して、琉球の魯般尺の裏面に分かり易いように、適宜、加除した使用例を記述したのだらうと著者は考えている⁴。

琉球王国時代、今の大臣に当たる三司官として特に有名な蔡温が、風水（易学）による治世を強力に推し進めたことは広く知られているが、その際にもたらされた可能性もあるだらう⁵。

3.3 一般尺と魯般尺の吉凶の関係

琉球の魯般尺や魯般真尺の解説を読むと「〇尺〇寸は、“吉”の文字の上に当たる」のような記述がなされている。その際、〇尺〇寸とは、一般の尺（以後、適宜、一般尺と呼ぶ）での寸を指し、“吉”は魯般尺上の“吉”や吉を意味する文字を指していると言える。そこで、実際に一般尺と魯般尺の吉凶の関係を算出して表1に示す。

表1を見ると、魯班経の中の魯般真尺の説明の正しいことが分かる。

迷信深き前近代において、吉凶を判別する物差しがあり、それをを用いると“吉”となるのは、重要なことであつたであらう。現在でも、この手の縁起を担ぐのは世の習いのようなものである事を考えると、魯般尺が琉球本土で士族を中心に利用されていた頃、その信頼は如何ばかりであつたかと想像がつく。

表1 一般尺と魯般尺の吉凶の関係

一般尺 魯般真尺 解説より	魯般尺の 大目盛	魯般尺上の文 字（魯般真尺 の解説より）
2.1	11.66	義（義）
4.31	23.94	吉（吉）
4.38	24.33	財（財）
5.66	31.44	吉（吉）
2.83	15.72	吉（吉）
4.2	23.33	吉（吉）
5.6	31.11	吉（吉）

例) 一番目の2.1尺（一般尺の二尺一寸）は、魯般尺の11.66目盛なので、大目盛の11番目を超えて12番目を指す。そこは“義”の文字の上にあたる。

ここで、表1の中の一般尺の4.31, 2.83, 5.66の各数値は、実は魯般尺の整数倍に近似する。次の表2に魯般尺の4倍までの長さを一般尺の長さと共に示す。

表2 魯般尺の整数倍と一般尺

魯般真尺 解説より	魯般尺の 倍数	一般尺
1.44	1	1.44
2.83	2	2.88
4.31	3	4.32
5.66	4	5.76

表2を見ると、一般尺の4.31尺（四尺三寸一分）は、魯般尺の3倍に極めて近似する。同様に2.83尺（二尺八寸三分）は魯般尺の2倍、5.66尺（五尺六寸六分）は、4倍に当たる。若干の差があるものの、これらは易学の「一白」、「四緑」、「二黒」にそれぞれ関係しているのだらうと思われる⁶。

ところで、2倍、3倍、4倍という整数倍の数値との符合は、第1節で竹富島の古老から聞いた「ひとけーし、ふたけーし（一

⁴ 文献 [11] では文公尺が原型だらうとしているが、推論の上の推論で、かつ物理的長さも合わない点に難がある。

⁵ 今後の研究が期待されるころではあるが、沖縄は地上戦で、多くの文物を消失したので、具体的な時期を特定するのはいささか困難であるかもしれないが、後学に期待したい。

⁶ 現在の著者の力量の範疇を超えるので、今後の研究課題としたい。

返し、二返し)」を想起させる。石垣市立八重山博物館には、4倍尺があったが、それは大きな両開きの門を作る際に利用した尺なのかもしれない。

3.4 魯般尺のメートル法による長さ

魯般尺を現代のメートル法で換算した場合の長さは、いくらになるのだろうか。「一尺」の長さは、地域や時代によって異なっている（文献[1-2]を参照）。また、用途によっても異なっている。魯班経の魯般真尺の説明にも、「按魯般尺乃有曲尺壹尺四寸四分，其尺間有八寸，壹寸准曲尺壹寸八分。（魯般真尺は、曲尺一尺四寸四分を案分し、その尺に八寸がある。（魯般尺の）一寸は、曲尺の一寸八分。）」の記述が見え、基準となる一般の尺の1.44倍が魯般真尺の長さであるものの、曲尺を用いると $0.18\text{尺} \times 8 = 0.96\text{尺}$ となることが記されている。魯班真尺の解説の中で現れた曲尺は、基準となる一般の尺よりも若干大きいことが分かる。

宮良殿内魯般尺、久米島魯般尺、竹富魯般尺は、それぞれ43.6cm、43.48cm、43.6cmである。久米島魯般尺が若干短い、それは反り⁷のためである。従って、これら3つの魯般尺の長さは、同じ43.6cmと考えて良い。そのため、これらの魯般尺を製作するに当たって用いられたであろう一般尺の長さは、 $43.6 \div 1.44 = 30.27 \div 30.3\text{cm}$ となる。この30.3cmは、明治度量衡法公布後の一尺に対するメートル法の基準長であるので、宮良殿内魯般尺、久米島魯般尺、竹富魯般尺は、明治度量衡法の公布以後に作られたと推定できる⁸。

また、宮良殿内魯般尺、久米島魯般尺、竹富魯般尺のすべてに、文字による吉凶の

目盛の他に、144本の細い溝による目盛がある（図10参照）。それは、これら3つの魯般尺が1.44倍された尺であることを示す決定的な証拠と言えよう。

この144本の目盛は、久米島魯般尺を除き、始まりが“財徳”で、終わりが“生旺”となっている。つまり、魯般尺の使い方の「以右手用尺，將財徳為首」に則して一般尺の目盛が、宮良殿内魯般尺と竹富魯般尺に施されていることになる。

ここで、琉球王府時代の魯般尺、ならびに一般の尺ののメートル法による長さについての詳細は、文献[2]に記述されているので参照されたい。文献[2]によれば、琉球王府時代の魯般尺のメートル法による長さは約42.78cm、一般の尺のその長さは29.78cmとし、日本の天平時代の唐尺の小尺(29.6cm)とほぼ同じ長さとして推定している(1.8mmの差は、測定地の温度と湿度の差による伸縮ではないだろうか)。宮良殿内魯般尺を見ると、100目盛目にV字の切れ込みを確認できるが、それは下段のメートル法の物差しの30cm付近にあるので、一般尺の一尺(明治度量衡法後の一尺：30.3cm)の目印となっているようである。つまり、宮良殿内魯般尺を作る際に用いた一般尺の長さは30.3cmであって、29.78cmではないことが解る。

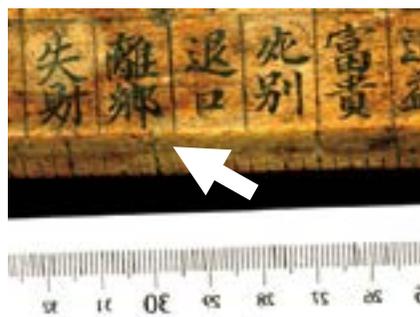


図10 V字の切れ込み

⁷ 文献[1]に詳細があるので、参照されたい。

⁸ 明治度量衡以前の琉球の尺の長さや、魯般尺（文献は「唐尺」を使用）の長さは、文献[1-2]を参照されたい。

4. 宮良殿内の二尺五寸の尺

石垣島にある宮良殿内には、魯般尺と一緒に大切に保管されているあるもう一つの物差し⁹がある。理由は後に示されるが、この物差しのことを便宜上、本論文では2.5倍尺あるいは三線尺と呼ぶことにする。

この2.5倍尺については、その利用方法が不明で、著者にこの物差しを見せてくれた宮良當房さんも何の物差ししか解らないとのことであった。

4.1 2.5倍尺の作者と作られた時期

2.5倍尺は、その年代と作者が尺に家紋付きで記されている。図11にそれらを示すが、それによるとこの2.5倍尺を作成したのは、宮良殿内の第8代の当主、宮良當宗¹⁰とわかる。2.5倍尺は、光緒十七年八月の辰の日の吉日に仕立てられている。

製作年月日は辛卯八月とあるので、西暦の1891年9月3日～10月2日までの間の辰の日となる。十二支が辰



図11 制作年・制作者

となるのは、9月3日、9月15日、9月27日のいずれかの日となるので、これらの日のいずれかに製作されたことになる。

⁹ 著者は、三線の研究を始めるまで、この物差しが何である見当も付かなかった。魯般尺(当時、著者も唐尺と呼称)を調査していた折、現在の当主の當房さんが「これも物差し」と言って、私に見せてくれたのが初めである。

¹⁰ 宮良當宗は、絵が堪能らしく、琉球大学付属図書館の貴重資料の中に、宮良當宗の描いた馬絵が12点保存されている。

光緒17年は明治24年の西暦1891年である。実は光緒17年(1891年)の3月24日に明治度量衡法が公布(施行は1893年1月1日)される。推測ではあるものの、おそらく石垣島の役人であった宮良¹¹當宗氏が、明治度量衡の公布を期に新しくこしらえた物差しであろうと著者は考えている。

ここで、魯般尺には制作者や制作年が記されていないが、記された文字の筆跡や、現当主の當房さんの話¹²から、2.5倍尺と同時期に作られたものと推定される。

4.2 琉球王府時代の2.5倍尺の長さ

図12に2.5倍尺の全体の写真を示す。

図12は、下段に魯般尺があり、上段に2.5倍尺があるが、魯般尺(約43.6cm)より長いことがわかる。2.5倍尺の長さは約75.75cm(図13参照)であるが、この長さは、反りの内側の測定値であるので、75.60～約76cmの目安で考えて良い。この長さは、ほぼ二尺五寸(75.75cm)になる。

先述したが、宮良殿内にある魯般尺の長さは約43.6cmであり、それを1.44で除すると30.3cmとなる。この30.3cmは明治度



図12 2.5倍尺(上)と魯般尺(下)

¹¹ 宮良家は、宮良間切の地頭職(八重山頭職)であり、いわゆる士族(役人)。宮良殿内というのは宮良家に対する尊称であるとともに、その屋敷の呼称ともなっている。宮良殿内は首里の士族屋敷を模倣した建築と言われている。そのため、度々、首里より取り壊しの命が下ったが、従わなかった。宮良殿内は、宮良家八世の宮良當演が宮良間切の地頭職にあった嘉慶24年(1819年)頃に建造された。

¹² 現在の当主の當房さんより「魯般尺を持ち出してきて、柱とか、門とかを祖父が計っていたのを覚えている」旨の話を得ることができた。當房さんの祖父は、新しく仕立てられた魯般尺を用いた場合の住まいの要所の吉凶について、気になって調べていたのだろう。

量衡法で定められたメートル法による一尺の長さとなっており、「宮良當宗氏が明治度量衡の公布を期に新しくこしらえた物」であるとの著者の推察が正しければ、魯般尺だけでなく、2.5倍尺も明治度量衡の公布を期に新しい基準でこしらえたと考えべきであろう。

文献 [2] において琉球王府時代の一般の尺の一尺が 29.78cm と推定されているので、それを用いると琉球王府時代の魯般尺の長さは、 $29.78\text{cm} \times 1.44 = 42.88\text{cm}$ を得る。

従って、比例式を用い手求めることができる。比例式は、

琉球王府時代の魯般尺：明治度量衡以降の魯般尺

||

琉球王府時代の 2.5 倍尺：明治度量衡以降の 2.5 倍尺

となるので、琉球王府時代の 2.5 倍尺の長さを X とおくと、

$$42.88\text{cm} : 43.6\text{cm} = X : 75.75\text{cm}$$

となり、これを展開して X を求めると、

$$X = 74.49\text{cm}$$

を得る。

この 74.49cm という数値は、75.75cm の 2.5 倍尺よりも 1.26cm ほど短い。

二尺五寸であるこの尺は、明治度量衡法に関わらず魯般尺で凶の意味を指す“劫”の位置にある。そのため、それをそのまま用いたと考えるのは難しいように思う。2倍して五尺にすると、“義”で吉の意味に当たるので、「ひとけーし」のように2倍して吉に当たるように用いた可能性がある。具体的には、二十尺までの偶数倍は吉に当たる。しかしながら、10倍の二十五尺では離（凶）になるので、8倍の二十尺までの範囲で利用された可能性がある。

4.3 2.5 倍尺の目盛

宮良殿内の 2.5 倍尺には目盛がある。

図 11 に示した制作者と制作年の面は、2.5 倍尺の裏の面の文字である。次の図 13 に目盛が施された場所を示す。目盛が大切な物的証拠なので、目盛が解る解像度と大きさを掲載する。

図 13 の左図を見ると、三寸（約 15cm）程度まで細かな寸分の目盛が刻まれている。ここで、30.3cm 付近に V 字の溝が見えるが、ここが一尺の位置であることを示している。一方、図 13 の右図は、2.5 倍尺の下部である。上部と比べて目盛の数が極端に少ない。下から 15cm 程（五寸）の所に V 字の切れ込みのある目盛の溝があるが、それは上の V 字の溝からここまでがちょうど一尺であることを示している。この下部の目盛の配置は、上部の目盛の配置よりもかなり簡素化されている。

実は、図 13 の左図の細かな目盛の存在が、この利用不明の物差しが三線の長さを測るための物差しなのではないだろうかという推察を著者に与えた。

琉球王府内では、三線打¹³において基準に従って三線の製作をしていたと考える方が自然であろう。基準が無くては三線の長さに大きなばらつきが出る。その基準を具現化した物差しが、本論文で報告する 2.5 倍尺と著者は考えている。

4.4 2.5 倍尺と三線のための尺

琉球王府時代から昭和初期頃までの沖縄の三線の長さについての詳細な研究成果は、文献 [4] にある。その概略を記すと、

¹³ 三線打とは、琉球王府内の奉行所の中にある組織で、三線などの製作を管理する部署である。『琉球国由来記』の「貝摺奉行」（文献 [24]，p.21）には、尚寧王代萬曆四十年（西暦 1612 年）の毛泰運保栄茂親雲上盛良を貝摺奉行に任命して、絵師・貝摺師のほか、三線打を管轄させたことが記されている。

琉球王府時代の三線（以後、琉球三線）は約77.44cmであり、昭和前期の三線よりも約1cm程短いものであったことが示されている。文献[4]においてそれは、長さの基本である尺の長さそのものが、明治度量衡の施行により1尺につき約5mm（魯般尺では、1.44倍の約7mm）程度、長くなったことによる現象であると推定している。

文献[4]において、明治期以降の三線の長さにはばらつきのあることが示されているので、ここでは琉球王府時代の三線の長さで考えることにする。琉球王府時代の三線の長さは約77.44cm程度と統計的に算出されているので、2.5倍尺（74.49cm）との差は約2.95cm程もあることになる。そのため図12の上図の物差しを三線を作る際に用いた尺（以後、三線尺）とするには、少々難があるように思える。

そこで視点を変えて図13の左図を見ると、先述の通り三寸（約15cm）程度までは、細かな寸分の目盛が刻まれている。これはちょうど三線の上部、ミルクミミ下からチラの頂点までとほぼ同じ長さである。図14に示す伊勢貞丈（1717-1784年）の作とされている三線の図では、その長さを四寸八分（一尺29.78cmの場合14.29cmとなる）となっており、三線の上の部分の長さに匹敵する。この部分は、歌口やカラクイ、チルダマイ、そしてチラ、チラカマチまで装飾的な要素を多分に含んだところであり、多くの場合、その細工でもって三線の型を区別ができる所でもある。そのため細かな目盛を用いた細工が必要であり、その意味において作成や検証のために詳細な目盛を配置したとすれば、理にかなった三線のための物差し（＝三線尺）と言えよう。

次に、そのまま下まで伸びてチーガの下端までで74.49cm使うと考えると、2.5倍尺が三線尺であるという可能性がさらに出

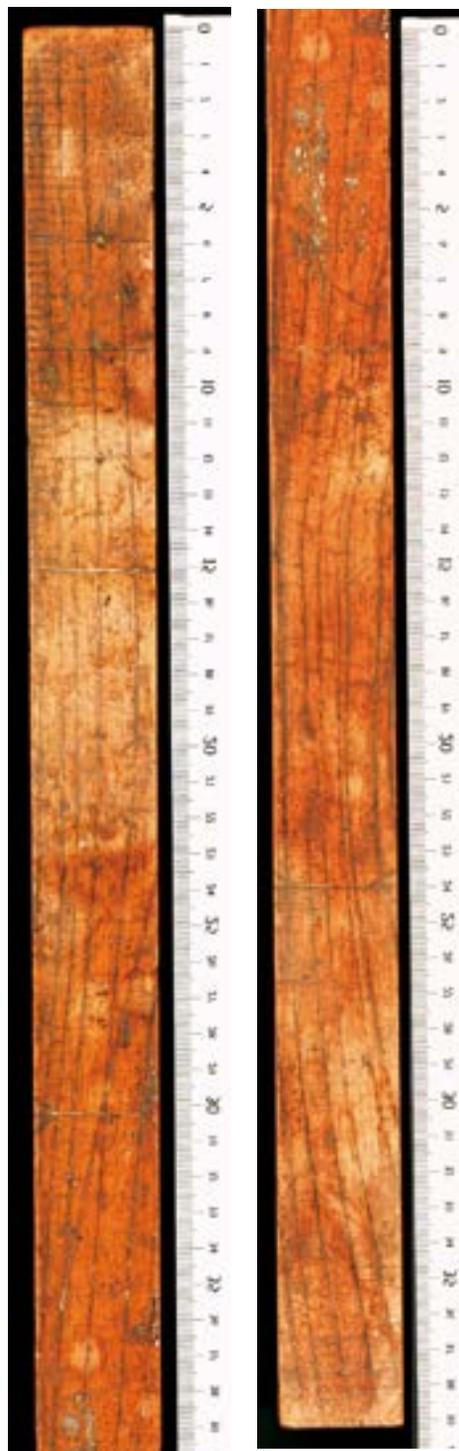


図13 上部（左）、下部（右）

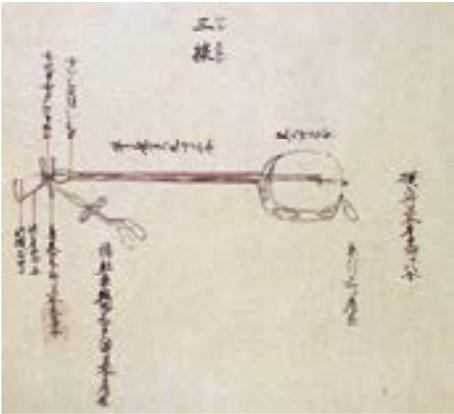


図 14 三線の図（古文書）
（出典：文献 [19], p. 73）

てくる。

77.44cm に僅かに及ばないその長さ (2.95cm) は、チルドゥミを掛けるためにチーガから飛び出たチーガタムチの延長であるミジアティと呼ばれる箇所長さと考えることができる。実に、このミジアティは約 2cm ~ 3cm 程 (約一寸) なので、それほど的外な解釈となっていないのではないだろうか。

実は、大正以前の沖縄の地において、三線制作者あるいは三線愛好家にとって、このミジアティの長さはそれほど気にならなかったのかも知れないと著者は考えている。なぜなら、図 14 にもミジアティと呼ばれる箇所の長さは記されていない。もしかしたら、琉球王府時代の慣習がこの物差しに残されているのではないだろうか。つまり、積極的な解釈をすれば、チーガとその上部の棹(ソー)の部分は、見た目のお切なところなので正確に計測する習わしが琉球王府時代からあって、そのための尺がこの 2.5 倍尺なのである。琉球王府時代においてミジアティは、あくまでチルドゥミを掛ける突起としての位置づけだったのではないだろうか。ミジアティは三線の棹(ソー)の長短に関わらず約 2cm 程度 (それより短

くても長くても不釣り合いになる) なので、2.5 倍尺に反映されなかったとの推論もあり得るのではないだろうかと著者は考えている。

明治度量衡法公布の後に作られた図 13 の 2.5 倍尺は 75.75cm であるが、これに 2 ~ 3cm 弱程度付加すると、約 77.75 ~ 78.75cm となる。これは文献 [4] における明治前期以降、特に昭和初期の三線の棹(ソー)の長さ近似する。

以上をまとめると、琉球王府期の 2.5 倍尺を考えたとき、それに約 2 ~ 3cm を付加した場合、琉球王府期の三線の棹(ソー)の長さに近くなり、明治度量衡法公布後の 2.5 倍尺に約 2 ~ 3cm 付加した場合は、昭和初期以降の三線の棹(ソー)の長さに近似することになる。これらのことは、この 2.5 倍尺が三線の尺であることの証左となっていると言えるのではないだろうか。

そして、実用的な観点から考えた場合、2.5 倍尺の方が、約 2cm を付加した約 2.57 倍の尺を作るよりも簡単で、かつ他の用途にも使える (2 倍で“義”の吉に当たる)。そのことを考慮すれば、2.5 倍尺が三線尺としての代用、あるいは逆に魯般尺の“義”を指す 5 倍尺を兼ねた三線尺なのではないかとの推論ができる。

4.5 三線の長さと言魯般尺

三線の長さと言魯般尺の吉凶の目盛との関連についての詳細な研究は文献 [4] にあるが、ここでは新たな知見を報告する。

琉球王府時代の三線の長さは 77.44cm 付近だが、これは魯般尺上で吉の文字にならない長さである。具体的には 77.44cm は、“害”で凶の文字の位置にいたる。

三線全体の長さが魯般尺において吉になるためには、魯般尺が 42.88cm の場合、一尺九寸八分 ~ 二尺三寸四分 (58.97 ~

69.69cm)、あるいは二尺七寸～三尺六分(80.41～91.13cm)となる。

文献[20]の『沖縄の三線』の中に掲載されている三線の中で、一尺九寸八分～二尺三寸四分(58.97～69.69cm)の三線は存在しない¹⁴。80.41cm以上の三線はあるものの4挺しかない。具体的に言えば、最長は真壁型で81cm(昭和初期製作)、次に80.9cmの久葉骨型(昭和初期製作)、80.6cmの与那城型(明治後期製作)と南風原型(昭和初期製作)である。

文献[20]の『沖縄の三線』から、経年の摩耗や縮み、測定誤差などを考慮して棹(ソー)の長さ79.5cm以上の三線についての頻度を表3に示す。また、それらの製作時期を表4に示す。

表3を見ると80cm台の三線の多くは、与那城型であることがわかる。意図的なのか偶然なのかは判断できないが、与那城型は、魯般尺において“吉”の文字を指す長さとなっている棹(ソー)が多い。

次に、表4を見ると、琉球王府期に製作された三線は、79.8cmの南風原型だけである。その次に79.9cmの真壁型が明治前期に1挺あり、明治後期に80.6cmと80.4cmの与那城型がある。大正期には79.8cmの与那城型1挺、79.6cmの与那城型2挺と南風原型1挺、79.5cmの与那城型1挺がある。残りは、昭和初期の三線である。そのため、厳密に言えば、明治後期の与那城型2挺が、魯般尺で吉をもつ棹(ソー)となる。

大正期までは、今の尺よりも短い明治度量衡法公布以前の尺や魯般尺によって三線を製作した匠が多くいたと思われるので、

¹⁴ 著者は、1挺非常に良くできた約67cmの“官”で吉を指す長さの三線を知っている。チラ(財:吉)、チルダマイ(財:吉)、ウタイグチからミルクミ下(財:吉)、チーガタムチ(義:吉)、三線全長からチーガタムチを減じた長さ(財:吉)である。チーガの蛇皮が破れているため、音が出せないのが、残念である。

表3 魯般尺で“吉”の三線数

	与那城	真壁	南風原	久葉春殿	久葉骨	知念大工
80cm以上	6	2	2	1	1	0
79.8cm以上	9	3	3	1	1	0
79.5cm以上	15	4	5	2	1	1

表4 79.5cm以上の三線の製作時期

	与那城	真壁	南風原	久葉春殿	久葉骨	知念大工
琉球王府期	0	0	1	0	0	0
明治前期	0	1	0	0	0	0
明治後期	2	0	0	0	0	0
大正期	4	0	2	0	0	0
昭和初期	9	3	2	2	1	1

そこに留意すれば、三線で古い型に分類される南風原型や与那城型は、そもそも長めの三線棹を作る傾向があったのかも知れない。その傾向が、魯般尺の吉凶の文字と関係するかどうかについては不明だが、文献[4]でも指摘のとおり、図14から算出すると、棹(ソー)のトゥーイの長さは一尺四寸四分(1.44尺)となるので、魯般尺と無関係であると簡単に言い切れない。積極的に考えれば、南風原型と与那城型は、音色の追及だけでなく、魯般尺における吉をも目指して作られた沖縄独自の三線とも言えるだろう。

5. まとめと考察

本論文では、宮良殿内に大切に保管されている二つの物差しについての論考を行った。一つは魯般尺。もう一つは2.5倍尺(三線尺)である。魯般尺では、その裏面に記された説明文の試訳を試み、魯班経に記された魯班真尺とほぼ同一であり、明代の牛

栄の魯班経、あるいは魯般真尺とその解説が、琉球の地にもたらされた可能性を指摘した。もう一つの2.5倍尺は利用法が定かでなかったが、上部の細かな目盛のある箇所が三線の上部にある複雑な形状の部分の長さとはほぼ同じであること、また全体の長さが三線の長さ(ミジアティを除く)に近いことから、三線の長さを測るための三線尺なのではないかとの推察を与えた。

琉球の人々の生活や価値観をうかがい知ろうとするとき、多くの場合、仏壇や神事、祭り、舞踊などが大きな助けとなる。本論文では、それらと異なるアプローチ、すなわち吉凶を計ることのできる尺(魯般尺)を通して、琉球の人々のそれらを知ろうとも試みた。

戦禍で多くの文物を焼失した沖縄にとって形のない世界の継承は、なんとかなされてきた。そのため現在でも多くの伝統行事や舞踊などが残っている。そして、それらを通しての研究は大いに進んできた。今後さらに研究が進み、その結果、琉球の人々の生活感も明らかになるものと考えられる。しかしながら、魯般尺のように、家の門、仏壇、さらには香炉のサイズ決定にも積極的に用いられてきた尺が、ほぼ完全に忘れ去られていることを鑑みると、今ではほとんど目にする事の無い、しかしながら琉球の人々が愛用してきた物理的な“物”を通しての研究を今後進めて行く必要があると強く思う。

謝辞

宮良殿内に大切に保管されている二種類の尺をお貸し頂いた、宮良當房さんに深く感謝したい。當房さんのご厚意が無ければ、魯般尺の裏面に記された魯般尺の使用法の解説、ならびに2.5倍尺(三線尺)への考察はあり得なかった。改めて、感謝の意を表したい。

参考文献

- [1] 「久米島に伝わる唐尺について」、久米島自然文化センター紀要第8号、又吉光邦, pp.7-16, 2008.3.
- [2] 「唐尺についての一考察」、又吉光邦, 産業情報論集第4巻第2号, pp.43-56, 2008.3.
- [3] 「統計処理から見た『沖縄の三線』の特徴」、又吉光邦, 産業情報論集第6巻第1号, pp.33-45, 2009.9.
- [4] 「『沖縄の三線』にある三線のソー(棹)の長さの研究」、又吉光邦, 産業情報論集第6巻第1号, pp.47-62, 2009.9.
- [5] 『沖縄の風水』, 窪徳忠 編, 平河出版社, 1990.
- [6] 「沖縄の唐尺と魯般尺」, pp.366-367, 窪徳忠, 宗教研究, 1994.
- [7] 『風水 気の景観地理学』, 渡邊欣雄, 人文書院, 1994.
- [8] 『風水思想と東アジア』, 渡邊欣雄, 人文書院, 1990.
- [9] 「琉球八重山の伝統的家屋—その方位と平面形式にかんする覚書—」, 笠原政治, pp.176-190, 民族学研究 39-2, 1974.
- [10] 『那覇市史資料編第2巻中の7那覇の民俗』, 那覇史企画部市史編集室, 1979.
- [11] 『フオクロア』, 徳井賢, 第十回記念東海民俗研究大会(南島の問題特集), pp.51-59, 1978.
- [12] 『山原—その村と家と人と』, 宮城真治, 名護市役所, 1987.
- [13] 『伊是名村史 下巻(島の民俗と生活)』, pp.446-447, 伊是名村, 1989.
- [14] 『日本人の相対的環境観—「好まれな空間」の歴史地理学』, 小出千明, pp.81-104, 2004.
- [15] 「ガンの寸法と唐尺との関係—済井出

- のガンの保存修理作業からー」, 山城正, pp.101-116, 名護博物館紀要9『あじまあ』, 1999.
- [16] 『中国古代度量衡図集』, 山田慶児・浅原達郎 訳, みすず書房, 1985.
- [17] 『沖縄の度量衡 はかりを通した人々の暮らし』, 名護博物館, 2003.
- [18] 『那覇市史資料編第2巻中の7那覇の民俗』, 那覇市企画部市史編集室, p.234, 1979.
- [19] 『図解 魯班経』, 午栄 編著・呉道儀 図解, 陝西师范大学出版社, 2010.
- [20] 『平成四年度 沖縄県文化財調査報告書 歴史資料調査報告書Ⅶ 沖縄の三線』, 沖縄県教育委員会, 1993.3.
- [21] 「奄美地方の唐尺について」, 窪徳忠, 徳之島郷土研究会報第19号, pp.26-34, 1993.12.



付録図1 久米島魯般尺 (43.48cm)



付録図2 喜宝院魯般尺 (43.6cm)